

ネパールからの留学生たち その1

特定非営利活動法人ミランクラブジャパン
理事長 マナダール マダープ ナラエン

ネパールと日本の関係はいつからかは定かではない。昔、日本に仏教が伝わり、ネパールには釈迦生誕地があることから、間違いなく古くから交流があったと思われる。

現在、数多くのネパール人留学生が日本で、その他の国々で学ぶ時代となったが、その昔、110年余りに初めての留学生がラナ時代に日本に派遣されていた。

同じ時代、今から110年余り前の明治31年、日本から河口慧海が約1年半ネパールに滞在し、仏教や修辞学を学んだと記録されている。河口慧海（1866年2月26日～1945年2月24日）は大阪府堺市生まれで、寺の僧侶となり、仏教の経典が中国や日本に伝わった際の漢語に音訳された仏典の本来の教えを求めた。梵語の原典とチベット語訳の仏典入手のためチベットへ行く途中、ネパールへ立ち寄り、日本人として初めてチベット入国を果たした人でもある。



河口慧海



ネパール、カトマンズ
ボダナートにある
河口訪問の記念碑

河口慧海がネパールを訪れた時代、ネパールは約106年間（1846年～1951年）鎖国にあり、ラナ族が支配していた。国王主権ではあったが、実際の政治は総理大臣ジャンガ・バハドゥル・ラナから始まった。政治の中核は親族で固め、絶対的な権力を握っていた。ジャンガ・バハドゥル・ラナは日本の豊臣秀吉のように底辺からトップに上りつめた人物だった。

そのジャンガ・バハドゥル・ラナの階級支配制度の下、後に総理大臣となったチャンドラ・シャムシェル・ラナは改革的な考えの持ち主であった。彼は今後ネパールも技術的な知識を得る必要があると考え、特に近代化のため、工学の知識習得を重視、ネパール人を外国へ留学させることを推奨した。それは1902年4月のことである。

留学に際し、総理大臣は一切のことを国が負担するとし、選ばれた8名の留学生たち、保護者としてスワミ・ギリ氏、及び世話役人たち、計17名の“費用を国費で、中国の近くにある国、日本に行くことを許可する”と命じた記録文が残されている。留学期間は3年であった。高等教育を受けるために海を渡った最初のネパール人だったため、政府は学生たちに留学中の報告を命じた。8人は、勉強、生活全般等、逐一、政府に報告していたとされる。

彼らは46日間かけコロンボ、ランゲーン、シンガポール、香港を経由し、神戸港から日本に入国し、その後も船で横浜港へと向かった。

留学生が書き残した報告によると、先ず困ったのは日本語で、そのため月100円払って日本語の教師を雇って、また年600円を医者払って、留学生の下宿先に往診してもらい、日ごろの移動には人力車を使ったとされている。 続く...



日本に留学した8名の留学生たち